様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２７１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３６７

研究課題名（和文）ローマの信徒への手紙の聖書学的・修辞学的研究

研究課題名（英文）A Biblical and rhetorical Study of Romans

研究代表者
原口　尚彰（Haraguchi, Takaaki）

フェリス女学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：６０２８９０４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、新約聖書中のローマ書の釈義的・修辞学的研究である。まず、本文批評の方法論を適用してローマ書のギリシア語本文の確定を行った。次に、確定された本文に対して釈義的・修辞学的考察を行った。特に、ディアスポラ書簡という視点から考察し、著者と異教社会の中に少数者として生きていたローマの信徒たちとのコミュニケーション手段として本書簡が機能していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This is an exegetical and rhetorical study of Romans in the New Testament. First, I employed the method of textual criticism to reconstruct the original Greek text of Romans. Second, I analyzed the reconstructed text in the perspective of biblical exegesis and rhetorical criticism. Especially, I interpreted Romans as a diaspora letter and tried to show that Romans functioned as a means of communication between the author and the Christians in Rome living as a small minority in the pagan society.

研究分野：新約聖書学

キーワード：新約聖書　ローマ書　修辞学　釈義　神学思想

１．研究開始当初の背景
(1) 研究代表者は新約聖書学の研究者として新約聖書中の諸文書の釈義的研究に従事してきた。特に、2,000 年以降は修辞学批評の方法論を新約聖書解釈に適用することに努めてきた。

(2) 初期キリスト教の思想的到達点を示す使徒パウロのローマの信徒への手紙（以下、「ローマ書」と略記）の注解書を書くことをライフワークとしてきた。

２．研究の目的
　ローマ書のギリシア語本文を釈義的に精密に読み解き、初代教会最大の宣教者であり、神学思想家であったパウロが、首都ローマに置かれた教会の信徒たちへ宛てて書いた書簡の思想が当時の状況の中で持った意義を解明することが研究の主目的である。

３．研究の方法
(1)新約聖書学の常道として本文批評と学問的釈義の方法をローマ書のギリシア語本文に適用して分析した。

(2)新しい方法論である修辞学的批評の手法による分析を加え、新たな洞察を得ることを目指した。

４．研究成果
(1) ローマ書研究の前提となる基本的な問題である本文批評上の問題を改めて検討した。特に、ローマ書の結びの頌栄句 16:25-27 については、写本の読みが分かれており、16:21-23 の後に置いているもの（P^{61} ＢＣＤ 81．365．630．1739．2464 et al.）の他に、14:23 の後に置いているものや（ＬＹ 0209^{vid} 1175．1241．1505．1881 Ｍ et al.）、15:33 の後に置いているものがある（P^{46}）。本研究は写本上の証拠を比較検討した結果、頌栄句 16:25-27 はそもそも本来の本文の一部ではなく、後から付加された挿入句であるという結論を得た。

(2) ローマ書の場合は、教理的記述である 1:18-8:39 と倫理的記述である 12:1-15:29 の間を分断する形で、ユダヤ人と異邦人の究極的救いについての記述である 9:1-11:36 が存在している。このために、この部分がイスラエルの運命について論じた独立の論説であり、後からローマ書に挿入されたものであると論じる研究者もいる。しかし、この部分がローマ書の本来の構成部分であることは、以下の理由により支持される。
　イスラエルの躓きと救いを論じる 9:1-11:36 の部分は、修辞学的には、本題から一時離れて違う主題を取り上げる脱線（digressio）と評価出来る（キケロ『発想論』1.51.91; クウィンティリアヌス『弁論家の教育』4.3.12-17）。
　他方、この部分は前後の文脈から独立しているとはいえ、書簡全体の主題とは共鳴している。例えば、業による義を追い求めたユダヤ人が義に達せず、異邦人がピスティスによる義を得ることとなったという 9:30-10:4 の記述は、論証部分の中核を構成する 3:21-28 の内容の救済史的展開である。11:25-32 に述べられているユダヤ人と異邦人の救いという結論は、書簡の冒頭部に提示された提題（1:16-17 を参照）の成就を終末論的希望の視点より論じたものである。

(3) ローマ書の書簡文学としての特色を古代書簡論の視点から分析し、友好的書簡・紹介状の類型の混合形であることを明らかにした。
　この書簡はパウロがまだ訪れたことがないローマの教会に対して(1:7，10-15)、将来のスペイン伝道の拠点教会の役割を期待して（15:22-25)、宣教者である使徒としての自己紹介をするために書かれている。ローマ書はヘレニズムの手紙のタイプから言えば、「推薦状」（偽デメトリウス『書簡タイプ論』第 2 類型;偽リバニオス『書簡形式論』第 55 類型)の性格が強い。他方、この書簡の書き出しの部分（前書きと感謝の祈り）と結語部分には（挨拶と祝祷句）には発信人とローマの信徒たちとの密接な関係を強調しており、「友好的書簡」（偽デメトリウス『書簡タイプ論』第 1 類型;偽リバニオス『書簡形式論』第 11 類型)の要素が認められる。

(4) ユダヤ教の「ディアスポラ書簡」の概念が、ヤコブ書やペトロ書等公同書簡の分析に援用されることがある。「ディアスポラ」とはユダヤの地を離れて異郷に暮らす離散のユダヤ人、または、その置かれた状況のことを指す言葉である。この概念は異邦人の世界に散らされて生活する初期キリスト教徒の状況の形容に転用することが出来る。研究代表者は一連の論文を通して、この言葉を民族的離散状態ではなく宗教的離散を指す概念として再定義した上で、ローマ書を含む新約書簡の多くは「ディアスポラ書簡」と呼びうることを立証した。

(5) この書簡はパウロがまだ訪れたことがないローマの教会の信徒達に対して(ロマ 1:7，10-15)、独自の福音理解を提示して(1:16-17)、その真理性を論証し（1:18-8:39; 9:1-11:32)、宣教計画についてローマの信徒達の同意と協力を得ることを目指している（15:22-24)。古典修辞学において演示弁論は賞賛や非難を通して、共同体が拠って立つ基本的価値観を再確認する社会的機能を持っている（アリストテレス『弁論術』1358b; 偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』1.2; クウィンティリアノス『弁論家の教育』3.7.28)。ローマ書の場合はキリスト教が拠って立つキリストの福音という基本的価値に関する理解を確立することが目的であるので、主たる機能において演示的であると言える。但し、信仰者としての生き方について語る部分には(12:1-15:29)、キリスト教徒の生き方一般に通じる倫理的勧

告（12:1-13:14）とローマの教会固有の事情に応じた助言（14:1-15:11）とが含まれており、助言的要素も併せ持っている。助言（議会）弁論は、聴衆の未来の行動に関係し、「あることをするように、或いは、あることをしないように説得する」機能を持つ（アリストテレス『弁論術』1358b; キケロ『発想法』1.7; 『弁論術の分析』10; 『弁論家について』2.10; 偽キケロ『ヘレンニウスに与える修辞学書』3.2.2; クウィンティリアヌス『弁論家の教育』3.3.15）。

(6) 内容構成（dispositio）の点から言えば、この書簡は、序論(1:1-15)、提題(1:16-17)、叙述(1:18-3:20)、論証(3:21-8:39)、脱線(9:1-11:36)、勧奨(12:1-15:29)、結語(15:30-16:23)より構成されている。

(7) イエス・キリストを表す名詞の属格は、初期キリスト教文書の用例において主格的であることも、目的格的であることもあり、文法的議論だけではその性格を決定することが出来ない。イエス・キリストを表す名詞の属格の意味内容は、それぞれが使用されている文脈を考慮して釈義的に決定するより他はない。

ロマ 3:22 に出て来る前置詞句 dia pisteos Iesou Christou における pistis は神の義の啓示の手段を表している。この前置詞句において想定されている pistis の動作主はキリストであり、この句は主格的に、「イエス・キリストの信実によって」と訳すことが出来る。

神の信実（ロマ 3:3）は父祖達に与えた約束の言葉を守ることにある。神の約束は神の子キリストを通して成就するのであるから（I コリ 1:18-20 を参照)、キリストの信実なる行為を通して神の信実が現実化する。

他方、パウロは、信徒の信仰を指して名詞 pistis を使用することも多い(ロマ 1:5, 8, 12; 3:27, 28, 30, 31; 4:5, 9, 11, 12, 14, 16, 19, 20; 5:1; 9:30, 32;ガラ 2:20; 3:2, 5; フィリ 1:25,27; 2:17; I テサ 1:3, 8 他多数)。キリストの信実なる行為を通して神の約束が成就したことを信じることが信仰の本質であり、人間の信仰は神の信実とキリストの信実への応答である（ロマ 3:28; ガラ 3:2,5, 7 他)。

人は律法の業によらず、キリストを信じる信仰によって義とされるというテーゼは（ロマ 3:21,18; ガラ 2:16)、神に従順であり、罪人を愛し、苦難を受け、死に赴いたキリストの信実に依拠している（特に、ガラ 2:20;フィリ 3:9 を参照)。信仰義認論は人間論的基礎ではなく、キリスト論的基礎の上に成立していると言える。

(8) ローマ書研究の集大成として学問的注解書を書き進め、その上巻を完成して刊行することが出来た(原口尚彰『ローマの信徒への手紙　上巻』新教出版社、2016 年９月)。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① 原口尚彰、フィロンの愛の教説:パウロの教説との比較検討、フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要、査読なし、第 2 号、2017、pp.17-25

② 原口尚彰、ローマ書の修辞学的研究、国際交流研究、査読なし、第 18 号、2016、pp.1-23

③ 原口尚彰、パウロにおける愛の教説、フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要、査読なし、第１号、2016、pp.21-42

④ 原口尚彰、パウロにおけるイエス・キリストのピスティスの意義、人文学と神学、査読なし、第 8 号、2015、pp.17-34

⑤ 原口尚彰、ローマ書の書簡論的分析、ヨーロッパ文化史研究、第 15 号、査読なし、2014、pp.135-153

⑥ 原口尚彰、ディアスポラ書簡としてのローマ書、新約学研究、査読有り、第 41 号、2014、pp.39-53

⑦ 原口尚彰、ローマ書の統一性についての文献学的考察、人文学と神学、査読なし、第 7 号、2014、pp.17-32

⑧ 原口尚彰、ディアスポラ書簡としての初期キリスト教書簡、東北学院大学キリスト教文化研究所紀要、査読なし、第 31 号、2013、pp.1-18

〔学会発表〕（計１件）

① 原口尚彰、信実か信仰か？ロマ 3:22，26 の釈義的・神学的考察、日本基督教学会、2014 年 9 月９日、第 62 回学術大会、関西学院大学（兵庫県西宮市）

〔図書〕（計１件）

① 原口尚彰、新教出版社、ローマの信徒への手紙　上巻、2016、273

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
原口尚彰（HARAGUCHI，Takaaki）
フェリス女学院大学、国際交流学科教授
研究者番号：60289048

(2)研究分担者
なし（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
なし（　　）